

日本は自主性を回復せねばならぬなどと大きな事を言つても、このていつたらくで、セクシヨナリズムやショートサイトで其日暮ししているようでは自主性などもらわぬ方が安全な位である。不磨の大典などはどうでも良い、再軍備がどうしても必要であるという考え方は、或角度からは正しいであろうがこの考え方の中には必要な装備と金をアメリカに出してももらいたいという前提条件がある。進駐軍備員の軍備などが果してどの程度わが国難を救いうるか。一文を使わず軍人を養う妙手などありうるか。金を使えばわが経済は破綻するかも知れない。このむづかしいかね合を救うものは矢張り貿易の振興である。

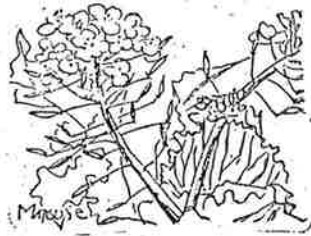
困難極まりない時勢に貿易を振興させねばならぬのであるから、生やさしい平時の手では駄目にきまつてゐる。

対外的には前記の米の援助を強く要請してその実現を期すると共に、国内的には貿易を人ごとのように考えず、また之を自らの限られた利害の観点にのみ立たず、強力なる挙国一致でぶつかる要がある。

どうもがいても欲しいものは手に入らず、不安極まりない国際情勢下、両陣營激突の前線に位置する日本の地位を考えれば、個人の食糧の買溜をとがめる暇があつたら、国家としての買溜にもつと真剣でなければならぬ筈である。

(東京銀行調査部長)

小川平吉翁の回顧



北 吟 吉

一 小川翁との初対面

僕は大正七年の夏の終り頃米騒動の時日本を後にして、欧米の永い留学を終えて同十一年の暮に帰国した。家族は千葉県一の宮町に留守してゐたので、こゝに落ち附いた。何しろ四年半も日本を留守にしてゐたので、新聞記者や雑誌記者が度々押しかけて寄稿を依頼した。「日々新聞」には「ベルグソンとの対話」「読売新聞」には「クロオチエを訪ふ」を書いた。十二年の改述の四月号の巻頭論文には「王道と霸道」と題する政治哲学の長論文を書き、翌月には「独逸革命の回顧」を公にした。これらは「哲学行脚」外二三の論文集となつて後に公刊された。

十一年の暮帰朝早々旧反の内藤民治の勧めで築地精養軒に於けるソ聯のヨツフェの歓迎会には発企人の一人として臨席した。三宅雪嶺翁が主人側を代表して歓迎の辞を述べた。終つて千駄

亞麻
スフ・絹紡
中央織維
東京・日本橋

亞麻の花
事業の華
山田 啓
東京 日本橋
取締役 啓

ヶ谷の兄北一輝の宅を尋ねたら、吟吉はなんだ、あんな奴の歓迎会などに出で。俺は小川(平吉)に金策を頼んで、ヨツフェ君に与ふる公開状」を各方面に配布したところだ。後藤新平などもやつけたところだ。「誰かに此の文を訳して貰つて、お前の知つてゐる世界中の学者に配布して呉れんか」。何分永い間不在だつたのでてんで世間が解らぬ。兎も角も兄の依頼だから、僕の旧弟子の某君に英訳させて、英米の諸学者に送つてやつた。もとハーバード大学で講義を聞いたことのあるロンドン大学のラスキ君にも一部送つてやつた。兄の公開状にはヨツフェをユダヤ人だとして大に攻撃してゐるが、ラスキもユダヤ人であると後に気が附いて、大に恥ぢ入つた。米国で親交があつたので大に友情を害ねたと後悔もした。

その後故の岩崎小彌太男に遇つたら男は「日本はソ聯と国交を恢復しなけ

ればならぬといふ説もあり一応尤もと思ふが、小川があいつは怪しからぬといつて、印刷物を出したいから少々寄附して呉れというので、ポツケット・マナーを少し出した。君はそのヨッフエの歓迎会に出たといふので妙なことになつたね」といはれた。

小川翁が僕の頭へ遣入つたのは、この事件を契機としてゐる。

僕が大正九年から十年にかけベルリンにゐた頃、ドイツ革命に就いて研究したが、大正六年十月レーニン、トロツキのボルシェビキ革命が成功して、直ちにドイツと單獨講和を結び、ブルストリトブスク条約を成立せしめた。初代駐独大使としてベルリンへ乗り込んだのが、ヨッフエで、彼は、ドイツでボルシェビキ革命を煽動するドイツ文のパンフレットを沢山外交文書と称して税関で無検査で搬入してゐた嫌疑があつた。時の外相ゾルフはアンハルターバーンホフで、所謂外交文書の箱

が壊れたといふ名義で（実は故意に壊したものである）中実を調べて、宣伝パンフレットを押収して、ヨッフエの召喚を要求した。僕が大正十二年改造の論文で之を公にし、後ゾルフさんが駐日大使の時に僕が時々通訳したので、晩餐に招かれた時に、このヨッフエ事件を話したら、「貴方はえらいことを詳しく知つてゐるね」と驚かれた。ヨッフエの悪いことは僕も百も承知してゐたが、小川翁や兄のように之を駆逐するよりも、高橋是情さんのように、大樺太でも買つて相談なら、悪党も利用の途ありと考へてゐた。後に小川翁と知り合いになつて、この話をしたら、それも一策だよと考へ込んでいた。しかし高橋は樺太を買ひ切れまいともいつた。

僕は十二年の夏までは一の宮に隠棲してゐたが、八月末東京の戸塚に移つて、そこで大震災に逢つた。一の宮在住中各方面から交渉があつて、八月

有島が死んだので、経済学者の土方成美君と文学者の石丸梧平君が代理講師となつて、僕と三人で富士見へ出掛けた。両君は富士見の旅館に泊つていたが、僕は特別待遇で眺望雄で一万尺以上のアルプスが幾つも見えるといふ小川翁の富士見の別荘に泊められた。小川翁は数名の幕僚を率いて、面白くもない僕の「ドイツ西南学派の哲学」の講義に三日間も列した。夜は愉快な酒宴であつた。こゝで小川翁は僕の試験もやつたようであるが、元々兄と親交があつたので、僕に対して格外に信用して呉れた。これは翁の死期まで続いた。

震災「大東文化協会」が設立され、会頭は大木遼吉伯、副会頭が二名で、貴族院を代表して江木千之、衆議院を代表して小川平吉、理事には和田彦次郎、鈴木喜三郎、山本梯次郎、大津準一郎、木下成太郎、酒井忠正伯、八条隆正子、蜂須賀侯等であり、この協会

の経営する大東文化学院の総長には平沼駿一郎が當つた。之は暫らくして井上哲次郎に代つた。小川翁は僕を木下理事と大木伯に紹介して呉れたので、僕は学院の教授となつて西洋哲学を担任し、かたゞ東西文化比較研究所の主任にもなつた。僕が四十才をこえて一流の政界人や一流の漢学者と知り合つたのは、小川翁の仲介に依るのであつた。富士見の講演の縁故が将来僕の履歴を規定するに大に力があつた。

日本新聞創刊の相談を当初から小川翁から受けたのも、富士見会談が機縁であつた。何しろ大東文化協会と日本新聞は同粹思想の牙城であつたから、僕の本質以上に、僕が保守陣営の闘士と認められたのも無理はない。殊に大正末期に創立された大正大学の哲学教授として就任して十年こゝに勤めたことも世間が僕をオリエンタリズム（東洋主義）の鼓吹者と認めた理由の一である。大正大学への出奔は大東文化学院

に信州木崎湖畔の夏期大学には末弘巖太郎君と一週間、軽井沢の夏期大学へは牧野英一、那須功、末弘君と四人で三日間講習に出張した。当時「婦人公論」の女記者の波多野秋子が度々来て、東京のインテリ婦人の集會に話してせよといつたので、上京して今の加藤勤十君の奥さん石本シズエの亭主の石本恵吉君宅に一泊して、ハイカラ婦人連の集會に講演をやつた。この前後に小川翁の郷里の諏訪の附近の富士見で三日間夏期大学をやることゝなつて僕が哲学、有島武郎が文芸を受け持つことゝなつてゐた。僕は急に都合が悪くなつて延期をして貰ひたいと思つて有島君に交渉しようとしたが、同君は行くへ不明であつた。焉んぞ知らん、僕の所へ度々来た波多野秋子と首をつつてゐたのである。回想すると秋子さんの眼が魅惑的であるが、何となく蛇を思はすような気味の悪いところがあつたように想ふ。

で知り合つた井上哲次郎博士の推薦に依るものであつた。想えば、僕が小川翁と知り合つたのが、波多野秋子の仲介に依る富士見の長期講習が縁であるなどとは、大に振つてゐるではないか。

二、小川翁と日本新聞

小川翁が日本新聞の創刊を思ひ立つたのは、売名や商売気からでは断じてない。小川翁は新聞創立以前既に天下の名士であり、鉄道院総裁も勤めたし新聞の発刊された年の、十四年の二月には既に護憲三派内閣の司法大臣に任ぜられてゐたから、売名などは寸毫も必要としない。然らば商売気質からといへば、そうではない。小川翁は新聞は俗悪な時流に媚びたものでなければ存続出来ないことは百も承知してゐた。嘗て原敬から毎夕新聞社長就任方を懇望されて辞したことも解る。然らば、何が小川翁をして、至難な新聞経営を決心せしめたか。一言にいへば

時勢である。

第一次大戦は大正七年十一月に終結したが、同六年のロシアの「ボルシェビキ革命は日本に深刻な影響を及ぼし、七年の敗戦に依るドイツの社会党中心の革命も日本には遠方の火災ではなかつた。保守的な英国でさへ大戦後マクドナル内閣が出来た。ロシアのロマノフ家ドイツのホーヘンツォルレルン家墺甸のハプスブルグ家相次いで倒れ、世界で君主国らしい大国は日本と英国だけになつた。日本も第一次大戦後反動で経済不況に陥り、東大の新人会を中心とする学生運動は遼原の火の如く燃え立ち、一般民衆間にも普選運動とからんで、労働運動、農民運動が旺盛になつて来た。殊に小川翁を最も動かしたものは大正十一年十二月二十七日の難波大助の大逆事件である。日本新聞の創刊も、大東文化協会の活動も、治安維持法の制定も、この大逆事件に依つて促進されたと看做されなけ

ればならぬ。敗戦後の今日から回顧して此等を種々批評しようが、何れも起るべくして起つた歴史的使命がある。

小川翁は難波の大逆事件に如何に大きな衝動を受けたかは、若槻礼次郎の「回顧録」に小川が議会の壇上で政治家自から責める嚴肅の態度を称讃し、大雄辯であつたと述懐しているのでも解る。小川翁は大逆事件の翌日思想団体青天会を自から発企成立せしめた。青天は十二月二十八日を意味するものである。青天会は日本新聞と不離の關係があつた。会員の重なる者は、井上哲次郎、五百木良三、阪東宣雄、花井卓藏、小川新、本多熊太郎、頭山満、大木逸吉、大島健一、東条英機、若槻礼次郎、徳田栄吉、原嘉道、永田鉄山、荒木貞夫、永田秀次郎、寛克彦、川島卓吉、上杉慎吉、近衛文麿、北里榮三郎、金杉英五郎、江木千之、平沼驥一郎、星野錫、長崎英造、鈴木梅四郎、僕及び日本新聞關係の若宮卯之助、綾川武治、

中谷武世、下位春吉等であつた。僕は東条は記憶はないが、近衛公や荒木貞夫に会つたのは、この機会である。小川翁が司法大臣になると、官舎で若い者同志で話が合うだろうと近衛公と一緒に二度までも食事招待されたが、近衛は僕に取つて印象の薄い男で興味を惹かなかつた。同じ華族でも大木伯の方が豪快で僕の氣に入つた。

日本新聞創刊当時は小川翁の日比谷の私邸か司法大臣の官舎でも相談があつたが、始めは小川の外には上杉と同郷の關係で渡辺千冬と山岡万之助と赤池謙（三者何れも信州人）僕とが遇つた。僕がなぜ始めから枢機に預かつたか不審であつたが、小川翁は三土忠造さんの紹介で岩崎小彌太男と知り合つていたので、僕が岩崎男と特殊の關係があつたので、僕を重用すれば、男の経済的援助に便宜があるとの底意もあつたようである。三井の右賀長文さんは小川翁と東大同期の卒業で相当の援助

は期待してゐたし、外に天下の糸平の後継が同郷の關係で相当援助してゐたようだし馬越恭平も相当のことはしてゐたようである。何れにしても小川翁は僕に向つて、君が編輯のことを主としてやるからには、社長としつかり合はなくてはならぬが、誰がよからうかと相談した。五百木はどうかと相談があつたが、この人とは後には相当懇意になつたが、僕の婦朝二年後くらいには實際がなかつたから、五百木さんでは外国の事情も知らず、時代感覚が乏しくはないかと蹴つた。然らば平松市藏はどうかと出た。平松は兄一輝とは懇意だし、硬骨漢のことは知つてゐたが、實際がないから承諾に苦んだ。兎も角も紹介すると小川邸で引き合はせて呉れたが、国本社と聞いて氣が進まなかつた。結局小川翁自から社長として乗り出した。

柳光亭の女中だつたお光といふのが経営してゐる品川の洲崎館といふところ

ろで小人数の寄合があつた。小川翁の外、弟の士郎君、木下成太郎代議士、福田和五郎、阪東宣雄、尾間立顯の面々が集まつてゐた。小川兄弟と木下の外は何れも初対面であつた。編集は尾間に任せるが、僕には編集陣を集めて監督をやつてもらいたい、論説も書いて貰いたいとの事であつた。尾間君は国民新聞の編集の経験があり、福田は二六で、阪東は旧日本新聞で経験があるから結構で、僕に編集監督の外に論説を独りで書かすのは無理であると主張し、論説主任の人選に移つたが、当時「中央新聞」の「天無口」欄で健筆を揮つてゐた若宮卯之助を思ひ出し一面識はないながら、之を推した。今度の日本新聞は政党色を脱して進まうといふのであつたから、誰も政友会の機関紙の若宮には氣がつかかなかつた。僕が切に主張したので一議に及ばず、その席で急使が立つて若宮を迎へ、即決で若宮を迎へた。

小川翁の直接推薦したのは、顧問として佐藤天風（嘗ての報知記者）同人として福田和五郎、阪東宣雄、尾間立顯君で、尾間が編集局長で、福田は「評論の評論欄を、佐藤は青眼白眼を阪東は遼東家欄を受け持ち、僕と若宮は交替に論説を書くことにした。之では余り古色蒼然たるものがあるので、僕は社員を物色した。僕が大東文化協会に入れたら綾川武治、中谷武世両君を日本新聞に兼任せしめ、綾川は「十六面棒」欄を受け持つて、流行新聞の論説を批評し、大学の赤化を攻撃した。外に僕の手で社員を迎へた者は津久井竜雄、狩野敏、正木昊、小佐井清平、八田元夫等である。津久井は後評論家として名を爲し、狩野敏は大川周明の神武会の総参謀となり、正木は自由法曹団の有力弁護士となり、八田元夫は共産党系の演出家となつた。小佐井のみは死ぬ迄日本新聞の学芸欄を受け持つた。綾川、中谷は二人共一度代議士に

なつた。

日本新聞発刊の際の主眼五項は上杉愼吉が起草し、綱領十五項は僕が執筆した。勿論小川、山岡の二人が訂正の相談に預かつた。発刊の辞は佐藤天風が得意の漢文調で名文をものした。街に配布する宣伝文は僕が起草したが、原文は手許にはないのが遺憾である。

小川翁は社長とはいふものゝ令弟の士郎君が主として代理をやつた。海軍出身で人格の立派な人で女房役には持つてこいであつた。早世したのが遺憾である。福田、阪東の両長老は人物が練れてゐて大人の風があつた。僕も両老とは生涯愉快に交際した。佐藤は文才の有る割合には、両老ほどの人望はなかつた。若宮と綾川は日本新聞には実に忠実に働いた。僕は若宮とは性格的には非常に異なつてゐたが、互ひに欠点を補う意味で彼の死に至るまで親交を続けた。彼の文才は大内兵衛が口を極めて称める如く天下逸品であつ

た。大学や法学士は散々に攻撃され、侮辱された。彼は日本主義者であつたが、軍部の国家社会主義かぶれや、政治、経済への干渉には極力、大胆に反対した。大東亞戦争まで生きてゐたらひどい彈圧を食つたかも知れぬ。

小川翁は社員に対しては小さい干渉はせず、仲々太つ腹であつた。僕や若宮が相当手きびしく政友会内閣を攻撃して、政治上の立場として困つても苦情はいはなかつた。不戦条約の締結の際などには、僕も若宮も遠慮なく田中内閣を攻撃しても干渉がましいことは一言も口にしなかつた。若宮などは宮内省攻撃を平気でやつたが、小川翁は牧野仲顯さんなどと交際があつても、文句はいはなかつた。

僕は唯一度小川翁にひどい迷惑をかけたことがある。それは外でもない。大東文化協会の騒動の際である。大東文化学院は朝野の漢学者を集めて出発したものである。東文から井上哲次郎

市村譚次郎、小柳司氣太、塩谷温、服部卯之助、外に高師から諸橋徹等が加はり、早大から松平康國、牧野譚次郎外に私学派から内田周平等の大部が集まつてゐた。兎角官学と私学とは両立しない。僕は小川、木下、大木伯から推されたのみならず、早大派の恩師、松平、牧野からも推されて比較的中間地帯にあつた。ところが偶々井上哲次郎博士が国民道徳に関する書を現はして、物知りになつて、横造の三種の神器の内の筆が焼けて無くなつて居るところを、崇神天皇の言葉を用いて述べた。それが早稲田の学者の井上排斥運動のきっかけとなり、松平康國などゝ親交のある頭山満、田中舍身等の井上排斥運動となつた。平沼驥一郎の兄の淑郎さんが早稲田派の漢学者の団体「東洋文化学会」の会長であるから、早稲田派の驥一郎利用となり、井上が不敬罪で起訴されさうになつた。そうして貴族院議員の辞職となり、大東文

化学院の総長辞任ともなつて、学界のローマ法王は一挙に日影者となつた。

教授の多数は総長事務取扱に大島健一（理事）將軍を押して学園の自由を擁護せんと企て、政治家連の干渉を排せんとした。僕個人としては何の関係もないことであるが、井上博士は私の一人しかない死んだ長男の墓碑の碑文を書いて呉れたばかりであるし、（表面は三土忠造氏に書いて貰つた）無援孤立の老学者を棄て去るには忍びず、頭山、田中両翁に人を使はして事情を釈明すると共に、直ちに大東文化学院並びに協会に辞表を提出して、直ちに元兇平沼驥一郎を葬むることに着手した。当時は国本社の社長、日大総長で人身攻撃など受けたことのない不可侵の身分である。

僕は小川翁から平沼については色々聞いてゐたことがある。平沼は始めから宮中入りに野心があるので、原敬が平沼が検事総長の地位を利用して岡引

をやるので困るので、小川翁が献策し

て、平沼が将来宮内大臣になるには一応大審院長にならねば具合が悪いといつて彼を大審院長に祭り上げた事や、大正天皇御崩御の際牧野宮相が英国留学の秩父宮を迎へざりし不手際を理由に牧野を辞職せしめて自から之に取り代らんとしたことを近衛が小川翁に「平沼は好物なり」と申したことありとのことである。又大木伯はざつとばらんだから、平沼を前にして、君まだあの女に關係があるかなど、平気で聞いて平沼を苦笑させたこともある。又国本社は社の支部の看板を各地の裁判所に掲げて公私混同をやつてゐた。又「国本」の名は戊申詔書の内の「国本に培い」から来たものであるが、戊申詔書を国本詔書を謹読しますなど、不敬を働いて居る。此等の事実を総合して平沼弾劾の大怪文書（実は正文書）を書いて懇意の寺田稻次郎君の名で出しても

らつた。又政教社に關係のあつた故田

中逸平に頼んで政教社の「日本及日本

人」に「大奸は大忠に似たり」の論文を執筆せしめて国本社に挑戦せしめ、僕自からも「日本新聞」紙上に国本社弾劾の論文を署名入りで掲げた。天下の国本社に正面から挑戦したので小川翁も相当心配したようである。大東文化学院では鶴沢総明博士も大島健一將軍も僕の辞職を慰留したが在任五年で辞職し、日本新聞も小川翁に迷惑を掛けてはと思つて辞職した。兄一輝は平沼と親交あり、平沼の謹直な点を高く買つてゐたので、僕のことを心配してゐたようである。

後増田一悦が間に遣入つて、平沼問題を解決させようとして、警保局長の山岡万之助と僕とを紅葉館で会食せしめた。話は簡単に纏つて刷つた残りの怪文書代千数百円は山岡が拂うから世間に出さぬこと、北君も大東文化を止めらるなら、平沼も鈴木喜三郎も理事を止めさせることにしようと話が纏ま

つた。後山岡の立会ひで鈴木邸で喜三郎さんに会つて、一日も早く平沼と鈴木が休めると話がついて手を打つた。増田一悦のよこした千数百円は僕は一文も使はず、寺田にもやらす、丁度東大生早大生等八九十名の団長として満蒙視察に赴く丸山鶴吉が都合悪くて行けぬから、僕に代つて呉れと頼まれたが、僕は雑誌「祖國」を創刊するので多忙で行けず、団長を早大の武田豊四郎に頼み、副団長に田中逸平と藤井真澄を推し、舎弟や寺田君を加へて出掛けさせた。出先で金が足らぬので武田君は「金足らぬ、恥を異境に晒さんとす。○送れ」と打電して来たので千円また追加して送つた。結局平沼騒ぎで千円損したことになる。田中といふ奴は妙な奴でハルビンで白系のパンパンを四五人で買ひながら、帰つて来るとテレビ隠して「日本及日本人」に幹部が放蕩したが、自分独り潔白であるが如く書いた。武田は之に関係なく大に

憤慨してゐた。その後、折能くも武田と僕と電車に乗つてゐると田中が酔つ拂つて酔眼朦朧としてゐる。僕は怒り心頭に発して、人込みの中を矢にはに頭を二つ三つなぐりつけた。乗客は僕に反感を持つたらしいから、大声に「彼奴はスリだ」と怒鳴つたら、却つてやれ／＼といふので、盛になぐつてくた／＼にしてやつた。荻窪で降りるのを引き留めて西荻窪で降して、又なぐつて血だらけにして、駅員が止めるので止めた。半歳後脳溢血で死んだ時には、僕も氣ますい思ひがした。何しろ僕も四十二三の若さだつたから元氣があつた。

僕は日本新聞は五年ばかりで止めて「祖國」の経営に専念した。小川翁は陰に陽に好意を寄せて呉れた。唯小川翁の潰職事件の時、平沼系の検事、殊に鬼検事といはれた石郷岡が非常に意地悪かつたといふことを聞いたが、若しそれが本当だとすると、僕の平沼征

伐がたゞつたわけで、今でも時々思ひ出す。しかし石郷岡を退職せしめ、彼を憤死せしめる某事件には僕も一役買つて出た。

三、國士小川翁の面目

小川翁は私鉄買収事件にからむ賄賂事件で入獄して一生を台なしにしたが僕はこの事件は今でも政争の具と考へてゐる。浜口内閣時代の安達謙藏の辣腕の結果と考へて居る。この頃は、芦田、西尾、栗栖、竹田、永江と戦後派の大臣は次ぎ／＼に繩附きになり、別に珍らしいことではないが、明治、大正を通じて昭和の十年頃までは大臣の前職あるものが獄につながれたものは小川翁が元祖である。渡辺千秋も田中孝顯も大浦兼武も隠居で済んで居る。小川翁も九州の富安の鉄道を政府で買ひ、五万円もらつたことになつてゐるが、小川翁の直話では、富安はもともと政友会いさいで野田川太郎を通じて

選挙毎に五万円くらい政友会へ献金してゐた。野田が死んだので小川を通じて五万円出したといふだけで、偶々彼の私鉄の買収の際と時期が一緒であつた。病氣の富安を検事が尋問して、無理に献金ではなく御札であると自白させた形跡がある。小川翁は強制收容中泥仕合を始めて、民政系の大臣や次官を未決にぶち込んだことがある。この

政友の泥仕合が政友を没落せしめて、血盟団、神兵隊、五・一五、二・二六事件を惹き起したといへる。当時の疑獄には司法フアツシヨの臭ひがあり、斎藤内閣を倒壊せしめた帝人事件で、三五や中島（久万吉）がぶち込まれて、而も無罪となつたことがある。当時、黒田、枇杷田両検事の如きは、愛国団体などで國士の如く持ち上げたが、二人共インテキ野郎であつたことは後で解つた。政界の金錢の受授、選挙違反等は正邪の問題よりも運不運が多く、賄賂はとりも取れる場合がある。芦

田の昭電事件なども逆賄すべからずといへる。

小川翁が獄に行く時、「雲は青天に在り、水は瓶に在り」と書いたことは当時の新聞にも書かれたが、之は鳩山さんが貴族院で無銭を取つたと攻撃された時「明鏡止水」といつたのと、世間では同様に解されてゐた。僕は出獄の時小川翁に言つた。先生の書いた文句は或る儒教の大家が道に徹せず、禪宗の老師を乞うて教を受けに行つたが要領を得ず、失望して帰らうとする。黙つて天を指さし、又側の水瓶を指さした。儒者は解らぬ。そこで「雲在青天、水在瓶」を大喝したのである。大道は露堂であることを道破したものである。僕は出獄後小川翁にいつたら、そうかなと思議がつてゐた。本人は明鏡止水くらゐに思つてゐたのかも知れぬ。

小川翁の裁判進行中に、翁は毎日比谷の自邸のあたりを朝早く散歩した

が、翁は帽子を取り、禿頭を露出して毎朝宮城に向つて、恭しく礼拝してゐたのが見受けられた。之を見た僕の知人が僕に語つた。あの窮境であの敬虔の態度は実に見上げたものだ。小川の尊皇は本物だといつた。正に然りである。

満洲事変後、石原完爾一派が満洲國を共和國にしようとして策動したことに就いて、翁は大に憤慨してゐた。曰く、「王様のない國に王道樂土とは何事だ」と。翁は満洲については、中央政府の宗主権を認めて、地方政權たらしめるといふ犬養の案に賛成してゐた。しかし、獨立國にするならば、光緒帝を持つて来るがよいと考へてゐた。しかし満洲國を軍部の天領の如く考へ、之を國家社会主義の試験台にしようとする満洲派の軍人共は大嫌いであつた。若官なども軍人のこの傾向を大に攻撃してゐた。所謂右翼とは日本新聞の論調は大に異つてゐた。

昭和十二年支那事変が起つてから、小川は大に心配した。翁は近衛が若いから何をやるか解らぬと考へて、二大献策をやつた。何れも極秘と銘打つた印刷物である。第一は「南京攻略すべからず」といふ献策である。支那は面子を重んずる国であるから、南京を攻略せず、南京近くまで日本軍が押し寄せた際、日本から講和話を持ち出す。先方に和を乞はせないで、戦勝国の方から東洋平和の大局から寛大な条件を以て和議を持ち出せといふのである。近衛は傾聴したと思ふが、優柔不断のハムレット型だから、何にも役に立たなかつたと思ふ。

第二は「大本営内閣の樹立」に関する献策であつた。内容は左の考慮から出て居る。戦争となれば、軍部は統帥権の独立、用兵作戦の独立などを唱へて、政府の知らぬ内に、勝手な所へ出兵などして、外交も何もやれぬ。仍つて陛下を頂上とし大本営内閣を作り、

かつたならば、政友も中島派、久原派（鳩山派）と二分せず、小川が鈴木後の総裁として、政党解消に反対し、民政と提携して、軍部の横暴に反抗し得たかも知れぬ。想へば、安達も悪いことをやつたものである。

昭和十四年の四月、僕は台湾、香港、広東を経て海南島に渡つた。香港では往復共に日支和平の運動をやつてゐた萱野長知翁に会つた。小川翁は萱野と連絡して香港に來た。勿論和平の爲めである。僕が広東を経つて帰国する前日翁は広東に着いた。憲兵司令官林清中佐は、満洲事変の発端、僕と洸南の河野公館で徹夜して飲んだことがあるし、昭和十二年僕が家兄のことで嫌疑を受けて九段の憲兵隊本部に二日間留置された時、特高課長であつたので旧知の間柄であつた。広東でも二度も飲み合つたほどであるから、小川翁の世話を頼んで置いた。個人的には仲々親切にしたらしいが、小川翁の和平工作

總理大臣始め閣僚一同が中心となり、軍部兩大臣もその内に入り、兩翼に参謀総長と軍令総長を置き、政治の大綱も、軍部の動きの大筋も總理と兩総長との合議に俟つといふ趣意である。近衛も大に之に賛成したが実現出来ず、結局「大本営連絡會議」といふ、幕僚連の連絡會議のようなものが出来た。近衛の翼賛会の構想も全国民を組織し軍部を此の内に包含せしめようと考へたのが、軍は外部にあつて翼賛会を使ふ形になつて了つたのである。近衛が「新体制早わかり」で新体制に依つて、国務と統帥の關係を密にするといつたのも、公の真意はそこにあつた。事志と異なつたものである。何しろミッドウエーの大敗戦すら東条は永い間知らなかつたといふ。国務と統帥の不連絡のみならず、統帥其物にすら連絡が欠けてゐた。小磯内閣の時、小磯が現役に復活して国務と統帥との連絡を計つて成らず、最後まで「国務と統帥

は軍部の横槍で何等の効果がなかつた。小川、萱野の和平工作の失敗については、三田村武夫の「戦争と共產主義」に能く書いてある。

其筋では国粹派は軍国主義者だと誤解する向きもあるが、小川翁などは支那事変には勿論、大東亞戦にも反対であつた。苟くも帝大の佛法科出である、世界の大事に通じない筈はないではないか。土着日本主義者とはその撰を異にする。大竹貫一翁が晩年僕に両国の旅館で會つた時「小川等は英米戦争はしてならぬといつてゐたが、僕はやれといつた方だ。今日日本軍の旗色が悪い。僕は権力者でないから直接責任がないようだが、やれといつた手前腹でも切つて国民にお詫いせにやなるまい」と述べた。

小川翁は、一般に政友会の連中はそうであるが、人情に篤かつた。僕の長男が大正十年三歳で亡くなつた時も、昭和十四年母が亡くなつた時も、自動

の吻合」などいふ珍文句を用いた。翁の大本営内閣論は卓見であつたから僕も鼓応して大本営内閣論を「祖国」誌上に書いた。終戦後、赤らしい奴がこの論文を引用して北はスファツシヨ内閣を主張したと投書を総司令部にやつた。之も僕の追放の一つの理由らしい。

小川翁は出獄後陶々亭で政友会の巨頭連を招待した。鳩山、前田、山崎（達）、岡田等二十三人が來た。僕は民政系であつたが、翁と別懇の間柄の爲め、特に招かれた。皆が黙してゐたので僕は翼賛会が憲法違反であると滔々として論じ立てた。翁は大に傾聴して僕に反対論の筋書を書いて呉れといつた。帰宅後も書かなかつたので、鄭重な手紙で近衛に見せたいから書いて呉れと云つてよこした。この手紙はあるが、返事はやらなかつた。僕は近衛は駄目な男だと見縊つてゐた。僕は思ふ、翁が私鉄問題で傷つかな

車でかけつけて、立派な供物を賜つた。三土さんもそうであつたが、戦前の政治家の人情味には頭が下る。

小川翁は客を好み、訪問すれば必ず酒肴を供へて御馳走する。この点は僕の交際した政治家では日本第一である。富士見でも、平塚の別荘でも度々御馳走になつた。産を破つて家を爲さず、広く天下の士と交はるの感があつた。僕は翁の死の直前、アメリカから來た最後のメロンを見舞にやつて、之を食べて一兩日後に亡くなつたことを聞いて、せめても大に喜んだ。

小川翁は末娘を政治家をいやがるから学者にやり度い世話しろといつた。僕はドイツで三木清といふ若者に會つて交際したが、之を推薦したいといつた。翁も賛成してゐたが、三木の婦朝が後れたので、娘さんは他に縁附かれ早世した。三木も獄死した。この娘さんは感じのよい、頭のよい娘さんであつた。



思い出帳

その一

サトウハチロー

「令度引越していらした褒のおうちの方に、いたすらをしたり、らんぼうをしたりしてはいけませんよ」
 小学校の二年の時に、母に、こう言われた。
 「褒のおうちの御主人様は、日本で大事な方なのですからね」
 母が、こんな、よそ行きたいな口をきくことはめつたにない。からだ小さくて、やさしくて、羊のヒゲをとつたような顔をしたおふくろだつた。
 「垣根に穴をあけて、今度引越していらした、おうちのお庭へ、はいつて行つたりしちやいかんぞ」
 おやちまでが、夕方のめしの時に言つた。えらいお客様がいらしやるのだから、今日だけはおとなしくしてろよ……は度々くつている。「ハイ」これはたいい引き受ける。
 どんなに長くいたところで、お客様なら知れている。長くて、五六時間だ。

半日のしんぼうだ。だが今度は、そうはいかない。引越して来て、デーンと住んでしまつたのだ。
 「とんでもないのが越して来たな」と、大いに弱つた。おやちとおふくろが口を揃えて、えらいお方だというがどんな具合にえらいのか、どの位えらいのか、こつちはわからない。だが静かにしてるに限ると思つたから、二日三日おとなしくしていた。と言つても部屋にとちこもつて、つつましやかに本など読んでいたわけではない。なるべくわが家にいないことにつとめたのだ。
 いまの東京の子は遊びに行きたくても近所に空地一つない。可哀そうだ。下町は勿論、山の手でもそうだ。ボクの小学校時代には下町にも空地が、うんとあつた。山の手は尙更だ、ボクの住んでいた町は小石川茗荷谷町だ、ちよつと行けば久世山という野球なら三

小川翁は浪人特有のユーモアを解してゐた。満洲事變の年の暮、安達、中野の謀略で、若槻内閣を倒したが、之には弗買ひがからんで居るとの定評があつた。長島隆二が兄の所へ来て一伍一什を話したから、万事心得てゐた。その後中野正剛が兄の所へ来て得々として若槻内閣の毒殺の計を談つた。中野の帰り際に、兄は戯れて曰く、「オイ中野君、定九郎が与市兵衛を殺すはいが、縞の財布は忘れるなよ」と。流石の中野も弗買ひを暗示されたので、赤い顔をし梯子段を滑り落ちた。僕がこの話を伝へ聽いて、小川翁に話したら、翁は腹をかゝへて笑つて、「一輝君でなければ出来ぬ芸だよ」といつた。又浜口内閣の時のロンドン会議反對に一輝が奔走して、有馬大將、末次大將等をオダテ、遂に統帥権干犯といふ政府に取つては不愉快な文句を發明した。日頃懇意な永井柳太郎が兄の所を訪ね、「北君、統帥権干犯などと軍

人を煽てることはいはずに呉れ」と懇願すると、兄は即座に答へて「うん、トウスイケンなどいふ支那料理屋の名前はやめよう」と答へた。流石の永井も二の句が繰げずあつてに取られた。陶々亭の株を持つてゐて度々行つた、小川翁に陶々亭でこの話しをしたら、うまいものだなあと感心してゐた。小川翁の隠れ家らしい所へも、若宮と僕だけは招待された。その時のエロ話しなどは仲々振つてゐるが、之は門外不出としよう。
 最後に、小川翁には大きな恩返しをやつてゐる。それは翁を苦しめた石郷岡鬼検事を世間から葬つたことだ。僕の附近に高円寺耕地組合に關係のある某弁護士がある。訴訟事件があつたが市会議員の大森の樂々園の鈴木堅次郎と石郷岡検事とが腐れ縁があつて、事件が進行しない。ところが、石郷岡は女癖が悪い、自分の花柳病をうつした女を他人に世話し、之が病気で入院す

ると、喜んでその女の処へ通う。この住所が僕の出入りの植木屋の家である。某弁護士はこれをすつば抜きたいから、怪文書の名義人を欲しいといふ。僕は小川の敵を葬るに絶好と思ひ、某君を紹介してやつた。ところが帝人事件に苦んでゐる三土さんの縁故の者が、石郷岡の家におて彼と關係し、後千葉方面に縁附いた後も、彼はラブレターを、り、家出させて、新宿の三越のエレベーター・ガールとなつてゐた、その女へのラブレターを僕の所へ持つて来た。石郷岡は黒田、枇杷田の親分である。一網打尽をやれといふので、怪文書となつた。之を岡本一巳代議士が有名な「さみだれ演説」の際、議會ですつばぬいた。斯くて石郷岡も現職を止め、窮死した。
 僕も今では温厚になつた積りだが、四十過ぎは少々乱暴であつた。墓石を書いた縁故だけで平沼に八つ当りし、大東文化学院も日本新聞も棒に振り、小川翁の知遇に感じては、一面識もな石郷岡を葬る策職を立てた。爾来二十幾年、今は追放で手も足も出ず、又余り出し度くもない。